



|                  |   |
|------------------|---|
| メタデータ項目          | 社会経営ジャーナル第5号掲載論文  |
| 題名<br>Title      | 自分史作成のすすめ   |
| 作成者<br>Author    | 朝日 直子   |
| 雑誌名<br>Citation  | 社会経営ジャーナル, 2017, Vol.5, pp47-50   |
| 発行者<br>Publisher | 放送大学社会経営研究編集委員会   |
| ISSN             | 2188-1073   |
| 巻                | Vol. 5  |
| ページ              | pp47-50   |
| 発行年              | 2017  |
| URL              | <a href="http://u-air.net/SGJ/pub/20171101J-Asahi.pdf">http://u-air.net/SGJ/pub/20171101J-Asahi.pdf</a> |

## 6. 自分史作成のすすめ

朝日 直子

### 要旨

環境や高齢化などの社会に対する問題意識を抱き、かねてからの研究テーマ「知的財産教育」とリンクさせることができるような解決手段を模索していた私は、「父の遠距離介護」というリアルな課題に直面します。独居高齢者である父は、身体の衰えを受け入れることができず、その怒りを、日ごと亡き母に似てくる私にぶつけ始めたのです。

「このような父と如何に向き合っていけばよいのか...」と思い悩む日々が続き、やがて私は、高齢者に対する傾聴活動に意義を見出すようになります。そして、高齢者に対する傾聴活動が認知され、全国的なネットワークができたならば、父のような独居高齢者に対する遠距離介護の負担が軽減されるのではないかと考えるようになりました。

そこで、誰もが楽しく傾聴活動を行うことができるようなシステムを開発し、そのシステムを多くの人に利用して頂くためのWebサイト「自分史作成支援サイト」の無料提供を始めたのです。併せて、当サイトを利用した「高齢者の見守り事業」を計画し始めましたが、その事業に対する協力者は未だ現れず、孤軍奮闘の状態。

これから私が採るべき進路は「方向転換」なのか、それとも「更なる前進」であるべきなのか...と思い悩みながら、本稿を書き始めております。これまでの自身の歴史を客観的に見つめながら、自分史を作成することで、きっと、これから進むべき道が見えてくるのではないかと、思うのです。

### (1) はじめに

まずは「私の自分史」におつきあいください。

1959生まれの私は、1987年に小学校教諭として社会に踏み出します。その後、中学校の数学科講師・専業主婦を経て、1995年、某出版社の教育アドバイザーとして、再び「教育」に関わることとなります。その傍ら国家試験への挑戦を続け、1997年に弁理士試験に合格。その翌年から、弁理士としての道を歩み続けております。

このような私ですから、「教育」と「知的財産」に関心が向けられるようになるのは当然のことと言えましょう。弁理士としての業務の傍ら、「知的財産教育」の研究をライフワークとすることとし、そのための知識を得るために、放送大学大学院の門を叩いたのです。

大学院で学ぶに従い、今まで漠然と感じていた疑問が、明確な問題意識となり、その解決手段を模索している私に気付きつつ、今日に至っています。

そのような私が、とある課題に直面することとなるのです。

### (2) 一身上の課題

千葉在住の私には、大阪に住む父がおります。父は、十数年前に母に先立たれて以来、身の回りのことを1人でこなしてきました。趣味の謡に熱中したり、友人とハイキング...と、一人暮らしの淋しさを紛らわすこともできた父も、体の衰えを感じるようになると、次第に外出が億劫になります。また、友達が1人死に2人死に...としていくにつれて、淋しさと共に、不安を抱くようにもなりました。耳が遠くなり、周囲の人の会話が聞き取り難くなるにつれて、社会との疎外感を感じるようになり、様々な愚痴を私にぶつけるようになったのです。

身体の衰えは全ての高齢者が経験するものです。それを父に理解させ、幸福を感じてもらえるようにするには、どうすれば良いのであろうか...、と悩む日々が続きました。

定期的に帰省しては父の話（殆どが愚痴）を聞いてあげる、ということが続いていたある日、1つのアイデアを着想します。

### (3) 課題解決の手段

いつものように父の話を聞いていたときに、学生時代や幼い頃の話をする父の表情が、とても明るいことに気が付きました。今までは「いつも同じ話ばかり...」と、うんざりしながら聞いていたのですが、父の話を、楽しく聴いている私に気が付いたのです（傾聴セミナーの先生によれば、「聴く」とは、「耳と14の心」で行う行為だそうです）。

「何故、うんざりすることなく、父の話を聞けたのかしら？」と考えるに、ちょうど、私が近現代史を学んでいた時期であり、私が興味を抱いていた分野の話だったからだ、ということに気が付きました。つまり、父が育った時代を知り、父が受けた教育を知ることによって、父の喜び・悲しみ・怒りなどの感情を想像することができるようになったんだ、ということに気付いたのです。

私の方から質問を発し、それに得意げに答える父の表情は、とても生き生きとしていました。聞いている私としても楽しく、繰り返される「いつもの話」に対して、心から頷いているのです。同感（他者と同じ感情を抱くこと）と、共感（他者の感情を想像できること）との違いを理解することができた瞬間でもありました。傾聴セミナーの先生によれば、「共感」とは人の心に寄り添うことであり、「同情」であってはいけない、とのことでした。

そこで思いついたのが、「近現代史を学びながら高齢者の話を聴く」というアイデアです。近現代史を学びながら高齢者の話を聴くことで、異なる世代の人（異なる価値観を教育された人）に対する共感能力が育成されるのではないかと考えたのです。

そして、異世代に対する共感能力を育成するためのツールとして、生まれた年を入力することで、誕生期、幼児期、小学校期...、とその人が生きた頃の歴史が表示されるようにする、というシステム（自分史作成支援システム）を考案したのです。幼い頃の自分と、当時の社会とを照らし合わせることで、当時の自分に戻り易くしよう、という試みです。

このシステムにおいて、話し相手（高齢者）の生まれた年を入力すれば、自身が生まれる前の世界を垣間見ることができます。そうすれば、高齢者の話を楽しく聴くことができ、適切な質問を発することができるようになります。このようにして得られた情報を基に、その方の自分史を作成すれば「ごく普通の人々の素晴らしい物語」を世に出すことができるのではないかと考えたのです。

早速、このシステムを取り入れたWebサイト「自分史作成支援サイト」<https://zibunnsi.site>を構築し、無料提供することとしました。





#### (4) 「自分史作成」と「高齢者に対する傾聴」との新結合

自分史作成支援システムを利用しながら父と会話するようになり、更なるアイデアが生まれました。「定期的に高齢者の話を聴き、その方の自分史作成を手伝う」ことで、高齢者に対し、自分史を作成するという「生きがい」と共に、見守られているという「安心感」を与えることができるのではないか、という発想です。

聴き手にとっては、「近現代史を学ぶことができる」というメリットがあります。これを事業化すれば、報酬を得ることができます。産業の発展にも繋がります。まさに、自分に良く、相手にも良く、高齢化社会にとっても良い「三方よし」のビジネスモデルです。

「このような事業（又は活動）が全国的に拡がれば、遠距離介護（精神面でのサポート）に悩む孝行娘(息子)がどれだけ助かることか...」と思い、私は、この事業を「自分史作成支援を通じた高齢者の見守り事業」と名付けることとしました。

#### (5) 「自分史」と「傾聴」と「高齢者に対する見守り」の新結合

この事業の実現に向けて悪戦苦闘する過程で、「自分史」と「傾聴」と「高齢者の見守り」とを新結合させたこのアイデアは、ションペーターが定義したところの「イノベーション」ではないかしら...、と思うようになります。

おこがましくも「イノベーション能力を育成するための知的財産教育を研究するぞ！」などと意気込んでいた私ですが、課題解決のために思考錯誤を繰り返すことで、「自分で自分を教育していたんだ。」ということに気が付いたのです。「イノベーション能力を育成するための教育」において、私は「教育する側の人間」ではなく、「教育さ

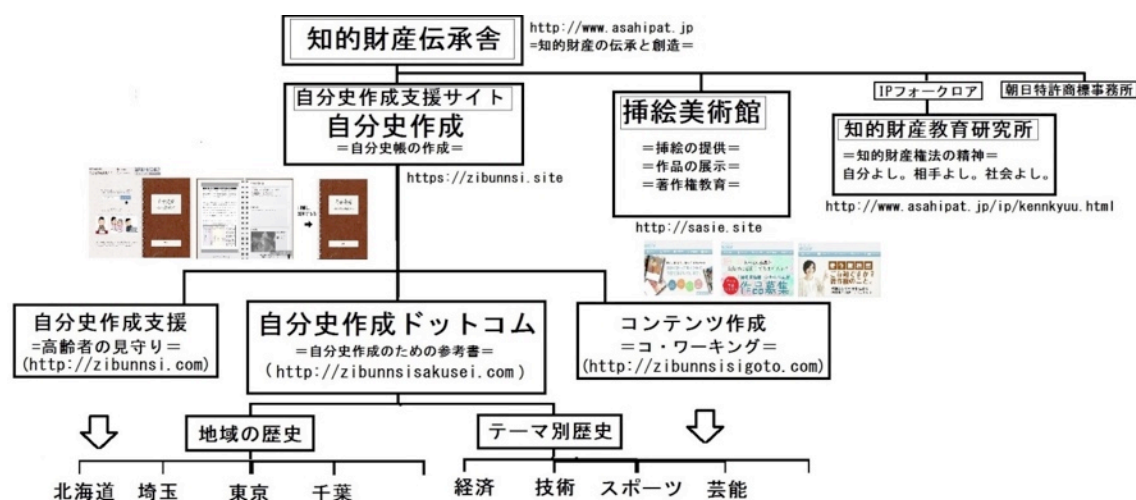
れる側の人間」であり、私を教育したのは「私の身に降りかかったリアルな課題」であったのです。

つまり、イノベーション能力を養うためには、「人を教育する」のではなく、「自分で自分を教育するしかない。課題解決に向けて思考を巡らす過程で、自身が教育されていくんだ。」ということに気が付いたのです。もしかしたら、これが私の目指していた「知的財産教育」だったのかもしれませんが。

#### (6) 「高齢化社会」と「知的財産教育」との新結合

「父の遠距離介護」という課題を解決するために考え、行動し、失敗し、また考える...という行為が、イノベーション能力を育成するための「アクティブな学び」であり、命ある限り続く「生涯学習」だ、ということに気が付いた私は、かねてから研究していた「知的財産教育」において、「自分史作成」という方法論を見出すことができました。

すると、自分史作成を充実させるための支援システムが次々に着想され、やがて、下図のようなネットワークを夢見るようになります。



高齢者に対する共感能力を育成するために開発された「自分史作成支援サイト」を通じて知的財産教育を行うと共に、「自分史作成」を通じた「学びの場」を提供し、それを高齢者の見守りやコンテンツ作成などの「仕事」へと繋げていく...という、あまりにも壮大なネットワークです。

#### (7) 自分史作成のすすめ

解決しても解決してもまた新たな課題が生まれるのがリアルな社会です。自分史を作成すれば、リアルな課題に目を向けざるを得ません。ですから、課題から目を背けず、立ち向かえ、と自身に檄を飛ばすこととなります。

このようなときに課題を共有し合えるコミュニティがあれば、どれだけ心強いでしょう。リアルなコミュニティを作るのが難しいのであれば、バーチャルなコミュニティを作ればよいのです。ネット社会ではプラットフォームさえ作っておけば、同じ課題を有する人が集い、コミュニティが自然と形成されます。その中で、誰かが解決手段を見つけてくれるのではないかと考えるからです。そのために、上図のサ

イトが役立てられるのであれば、どんなに嬉しいことでしょう。ですから、自分史作成を通じてリアルな課題を共有し、その解決手段を共に模索してみませんか、と呼びかけたい気持ちなのです。

以上